通話NG WiFi OK

機内の電子機器使用 今夏解禁

5/13 上陸中央

今夏にも旅客機内でスマートフォンやタブレット端末といった電子機器の電源を切らず、ゲームや音楽、動画を楽しめるようになる。「計器に悪影響を与える恐れがある」と、離着陸時は特に制限されてきたが、米国が昨年10月に解禁。欧州も規制緩和の方向で、日本も足並みをそろえる。

一般的な光景

離陸に向け動きだした機内でタブレットの電子書籍を読み、上昇中に窓から見える街並みをデジタルカメラでカシャ。目的地に着陸すると、駐機場に着くまでにスマホでバスの時刻表を調べ、到着を知らせるメールを家族に送る―。いずれも禁止されている行為だが、夏からは一般的な光景になりそうだ。

離着陸時も使えるようになる機器は、地上と通信しない「機内モード」に設定したスマホ、パソコン、デジタル音楽プレーヤー、デジカメ、携帯ゲーム機、無線通信技術「ブルートゥース」によるワイヤレスヘッドホン。一気に解禁する。

携帯電話の通話、インターネットは今後も禁止される。ただ現在、通話とネットは着陸後、ドアが開くまで使えないが、滑走路を離れ誘導路に入った時点でOKになる。国土交通省は世界的な規制緩和の流れを受け、基準の見直しを検討。独立行政法人「電子航法研究所」の協力を得て、電子機器が発する電波に対し国内旅客機の多くが耐性を持つと確認した。航空各社が安全性をテストするのを条件に解禁するという。電波への耐性が低いとされる小型機や旧型機は、規制が続くものもある。

離着陸時の電子機器使用ルール
（国土交通省案、実際の運用は各社が決定）

※着陸後、滑走路を離れたら使用可

	現在	規制緩和後
携帯電話	×	×※
スマートフォン（通常モード）	×	×※
スマートフォン（機内モード）	×	○
パソコン	×	○
デジタル音楽プレーヤー	×	○
デジタルカメラ	×	○
携帯ゲーム機	×	○
ブルートゥース	×	○
電動シェーバー	○	○
電卓	○	○
機内WiFi	×	○

航空各社運用決定 LCCと差別化図る

装備機体標準に

「規制緩和はサービス向上につながる。搭乗中にインターネットを使いたいという要望も多く、今後は機内WiFi（ワイファイ）を装備した旅客機が標準になる」。日航の担当者が話す。

機内WiFiは、機体に衛星通信用のアンテナを設置、乗客がスマホなどでネットに接続できる仕組み。日航は2012年に国際線の一部で導入、7月から国内線の主要路線でもサービスを始める。国際線66機と国内線77機で16年度末までの導入を目指す。料金は国際線で1時間約12ドル、国内線の羽田―福岡でスマホが500円、パソコンが700円。

全日空も3月から国際線の一部で導入し、14年度末までに国際線の約3分の1に当たる28機に拡大する計画。料金は容量に応じ、5～20メガバイトで6～24ドル。独ルフトハンザ航空や米デルタ航空などが先行導入しており、日航と全日空は海外大手に追いつき、格安航空会社（LCC）との違いを際立たせる。

機内WiFiはこれまで上空の安定飛行中の使用に限ってきたが、国交省は規制緩和に合わせ、常時可能とする見通し。

マナー順守を

機内環境はどう変わるのか。航空・旅行アナリストの鳥海高太朗さんは「時間に追われるビジネスマンが離着陸時も、メールや電子新聞を読めるのは大きな変化。子どももゲームができ、退屈せずに過ごせる」と話す。

電子機器の使用が広がると、携帯の電源切り忘れや、通常モードのままのスマホの持ち込みが増えると予想され「静かに過ごしたい乗客もおり、シャッター音がするデジカメなどには注意が必要」と指摘する。

国が規制緩和しても、実際の運用は航空各社が決め、機内の安全ビデオなどで周知を図っていく。着陸後の通話や、機内WiFiに接続したスマホでの無料通話アプリの使用も法令上は可能になりそうだが、機内マナーの観点から各社は引き続き禁止するもよう。快適なフライトには、ルールの徹底や乗客の配慮が欠かせない。